これからの猪猟

〈7回〉

田宮　治

持つべきものは良き猟犬

下の民家辺りまで少しでも早く下りなければと思い、「さあマロや、もう時間がないから帰ろう」とマロ号に綱を付けた。猪からなかなか離れなかったので、その場で猪を思い切り蹴り落とした。猪は急斜面を二〇㍍くらい転げ落ちて行き、マロ号もやっと後を付いて帰る気になった。

マロ号と一緒に、足場を探りながらゆっくりゆっくりと栗林の広場まで下りた。すぐ下に民家が見えているが、うまいこと畑跡に出て、少し歩くと良い道が続いている。さらにその坂道を二つ曲がった所に大きな石碑が建ち、ベンチが並んでいる公園風の高台に出た。

そのベンチに座ってすぐ下の民家を見ると、どうも温泉宿（積翠寺温泉）のようだ。私は知らなかったが、この山奥にある温泉は有名らしく泊まり客の車が何台も並んでいた。今度来た時は、この温泉宿に泊まってこの山を狩るのもおもしろいかもしれない。

そんなことを考えていると、下の道に三台の軽トラックが入って来た。マロ号を連れて下りて行くと、松土さんがニコニコしながら「こんな所まで来ていたのかよ」とびっくりしている。私の一報で自分たちの猟を中断して、小宮山さんと四人で駆けつけてくれたのだ。「悪かったね。ありがとう」とまずお礼を言った。「こんな山で猪を獲ったのか」と笑顔でみんな驚いている。

大杉林の山並みを見上げて「どの辺りですか?」と聞いてきたので、「こっちだよ」と下りて来た道を登って案内しようしたが、かなり疲れ切っていたので、後ろにいた小宮山さんがその様子を見兼ねたように、「さっき確認した所が猪のいた場所だよね」と言ってくれた。さらに「三人で行って下ろして来るから、松土さんとここで待っているといいよ」と小宮山さんが気遣って言ってくれた。

道端に松土さんと二人でどっかりと座り、お互いに今日戦った様子を語り合っていた。間もなくすると猪を引き下ろして来た。若いというのは凄い。私と松土さんの待つ道ではなく、軽トラックが止まっている温泉前まで小沢伝いに猪を引きずり下ろしている。その働きぶりはあまりにも見事だった。

「松土さん、本当にありがとう。お陰で助かりました。ついてはあの猪を皆さんで分けてください」と申し出た。撃ち獲った時はグレ猪でガリだと思ったが、スコープを五倍にして見ていたので大物と勘違いしていた。よく調べてみると、追っかけと雪のためで痩せてはいるが、八〇㌔（本来は一〇〇㌔くらい）の若い猪なので、かえって食べるにはちょうどよかったようで、「皆さんに差し上げるつもりで来てもらった」と説明した。

松土さんは「せっかく獲ったのに、それは……」と遠慮気味だったが、「私は単独で猪の多い県に出猟していたので猪肉はたくさんあるし、猪を丸ごと持って帰ろうものなら妻に怒られてしまう。それに今日は泊まることにしているからそのほうが都合いいので」と正直に気持ちを伝えた。

松土さんはとても喜んでくれ、

そのことを小宮山さんたちに話してくれると、皆さん大喜びで頭を下げてお礼を言われた。「大変だったね。お陰で助かりました。これからもよろしく」と心から感謝した。

私と立ち話をしながら、てきぱきと猪をトラックに積んでいる様子を見ていた松土さんは、「皆さん方は先に帰ってください。私は田宮さんを中部林道の峠まで送ってから戻るから」と告げて、マロ号の待っている下の車に向かった。

「マロ、よく待っていたなあ」と頭を撫でているのを松土さんが見て、「この犬一頭でこんな所まで追って来たのかよ」と、また改めて驚いている。この上の大杉林は一度、橋爪さんと上から狩ったことがあるが、なかなか猪の狩りづらい難所で、それ以来、狩ったことがないという。

二人で車に乗り、道すがら「ここが山梨で有名な要害温泉です。この道の両側は保護区で、山の奥には一軒の民家がありますよ」と、私のために種々説明してくれた。切差集落から中部林道に入り、約四十分で私が車を止めておいた峠の広場に着いた。

明るいうちに車に戻れたのは何よりだったが、心配していたヨシ号とシロ号はまだ車に戻っていなかった。やはりヨシ号とシロ号は朝一番に小屋の沢で猪を起こして、マロ号と分かれて、止めては逃げられ、また止める、を繰り返しながら私たちを追って、峠の車を止めてあるすぐ下まで猪を追い上げて来ている。

この子たちを置き去りにした経緯を松土さんに説明しながら、GPSでヨシ号とシロ号の位置を見せると、いつも二人で狩っている猟場だったので「大岩のある峰から下りた沢だ。すぐ駆けつけよう」と言ってくれたが、「この先は私一人で十分です。ヨシ号たちはまだ戦い続けているが、今からでは危険なので、この場で犬たちを呼び戻してから帰るので、どうか心配しないで早く皆さんの所に帰ってください」と言った。

松土さんはさすが犬持ちの勢子長（親子）であり、犬たちが戻らない中で帰るのがよほど気になるようで、「悪いなあ、悪いなあ」と盛んに言っていたので、「もう大丈夫です。ここまでやっていただいたのだから。それに今夜は塩山温泉に泊まるので、ここからは直接帰れますから、明日またよろしく頼みます」とお願いした。

日曜日には松土さんと二人でいつも猪猟をやっているので、お互いに「ありがとう。それでは」と挨拶を交わして松土さんは帰って行った。

GPSを見ながら、夕暮れの谷間に向かって大声で「ヨシ、シロ、来い……」と三、四回呼んだ。すると、ヨシ号とシロ号は私を待っていたようで、すぐ声に反応して動き出した。そして、慣れた猟場だけに五分もしないうちに大岩の峰を上り、そこからいつも通っている小峰伝いに元気な姿を現した。

「来い、ヨシ！　来い、シロ！」と呼ぶと、ヨシ号とシロ号が転げ

猪猟の基本は素晴らしい猪犬作りにある。猪犬は固定しているとどの犬の仔犬もそっくりである。必ずやることを尽くせば一流犬になる

るように下りて来て、元気に尻尾を振りうれしそうに飛び付いてきた。「よしよし、よく頑張った。頑張ったなあ」と全身を撫で回し、頑張り通した戦いぶりを褒めてやった。犬たちの戻りが良くなるのも、犬芸が一流になるのも、このような究極の場で主人が愛犬たちに示す気遣いである。

大好きなコッペパンを与えて水を飲ませて全身を撫で回しながら体全体を点検するが、長時間の激戦にもかかわらずヨシ号もシロ号も全く無傷だった。何事もなかったようにケロッとして、私と会ったうれしさではしゃいでいる。

私は極致の芸に成長したヨシ号とシロ号を愛しく思い、心の中では今日見捨てしまったことを詫びていた。「ありがとう、ヨシ。ありがとう、シロ」と声をかけ、車の犬箱に乗せた。もしヨシ号とシロ号に付いて猪を追っていたら、こんな苦労せずすぐ撃ち獲れたものをと残念でならなかった。

赤芝沢の大橋を渡る時にはとっぷりと日が暮れ、ヨシ号たちが一回目に止めた現場は見えなくなったが、せめて詫びることで、この子たちを明日の成長に繋げてやりたいと思った。

ただ一人の晩餐会

戦い済んで日が暮れた山道を犬たちと話しながら、丸一日をともに戦い抜いた単独猟に、また一つの大きな自信を感じた。この年齢になっても「まだまだ、これからだ」と、信念を持って猪猟を推し進めることで、自らの自信を確信に変えていかなければ単独猟は成り立たない。

グループ猟ならいざ知らず、単独でひとたび実戦の場に立てば、頼れるのは自らやり抜いて積み重ねた自信以外にない。誰も助けてくれない中で、常に犬たちとともに楽しみながら納得できる最高の結果を残すことが、単独猟で求められる普遍の真理なのである。

その考えで、やるからには必ず最高の結果を残すことと、大事な結果をきっちり残すための準備に、究極の武器である一流猪犬軍団を作り、実践しているのである。

ものの見事にその結果が今日の一戦に出たのだから、こんなうれしいことはない。マロ号、シロ号、ヨシ号に感謝の言葉をかけてやりたい。そんな満足感いっぱいで塩山温泉N旅館に着いた。時間は六時になっていた。

まずは、今日頑張り通した立役者である愛犬たちに、激戦の勝利を労うためにうまい食餌をさせてやりたい。今宵の食餌はマロ号たちにとって、大一番を締め括って次の成長に繋げる大事な晩餐となるので、愛犬たちが喜び、一番元気づく最高のプレゼントでなければならない。

この時のご馳走となると、やはりその日の大一番で死力を尽くして勝ち獲った猪である。その猪を犬たちの前で解体して血肉や内臓を与える。これに勝るご褒美はない。

この「うま味」を激戦の余韻が残っているうちに存分にご馳走してやるのが主人の大事な役目であり、猟芸を成長させ、さらなる極致に導く良薬となる。だから、どんなに疲れていようと愛情を込めて必ず実行することである。

しかし、今回仕留めた猪は松土さんのグループに差し上げたので、今宵の食餌には肝心な猪肉はない。大仕事をやり遂げたご褒美には物足りないかもしれないが、疲れ切った愛犬たちのためにドッグフードにとり缶を多めに混ぜ、水をたっぷり入れたものを、頭を撫でて話しかけながら与えた。

猪との激戦で本当に疲れ切った犬たちは、水を一番欲しがるので、器になみなみ入れてやるのがちょうどよい。マロ号もヨシ号たちも、まず「水で乾杯！」というように一気に飲み干してから、うまそうにペロリと食べてくれた。

「お前たちと一杯やりたいところだが、仕方ない。今宵はただ一人の晩餐会といくか」と言って、「ゆっくり寝ろよ。また明日、ヨシとシロの今日の惜しさを晴らしに行くからな！」と言い残し、N旅館自慢の温泉に飛び込んだ。

若い頃の猟は妻と孫まで一緒だった。一夜を存分に楽しむために、石和観光ホテルや鬼怒川観光ホテルといった一流ホテルを常宿

にして家族で猟を楽しみ、ワイワイ、ガヤガヤと温泉気分を堪能していた。しかし、この年齢になると、いつの間にか孫は成長して高校生になり、妻も犬たちの世話で一緒に出猟できなくなった。

私はもっと良い猪猟がしたくて、一流猪犬の完成を目ざして頑張れば頑張るほど犬の数は増え続け、その世話をするのも半端ではなくなった。私が出猟の時には妻が犬たちの世話にかかりきりとなり、とても猪猟や温泉旅行を一緒に楽しむどころではなくなったのである。

犬を一〇〇頭以上飼うことだけでも、その管理は想像を絶する。私と妻が一日も休まず、毎日働き続けなければならないのだ。そんな中で、訓練や猪猟で山に出かける時には、どうしても妻以外にもう一人増員して犬舎運営に当たらなければならない。

だから、今日のようにただ一人で見事な猪猟を実践して納得の結果を出しても、やはり犬舎で頑張って私を支えてくれている妻たちが気がかりでならない。家族ぐるみで気ままに楽しめた若かりし頃とは、ガラリと様変わりしているのである。

私は今日の猟が無事に終わった時点で妻に激戦の結果を報告した。「それはよかったね。犬舎は何事もなく大丈夫だから、早く宿に帰って休んで、また明日も楽しんでください」と、妻は元気な声で喜んでくれていた。その後、宿に着いて温泉につかって身も心もすっきりしてほっと安堵した食事前に、この喜びを改めて妻と分かち合いたいと思っていたので、電話して今日のマロ号たちの戦いぶりを詳しく説明した。

愛犬たちはどこに泊まらせても絶対鳴き騒がないように万全の訓練をしている。しかし、その主人である私が、老人の一人旅である上に、猪を撃ち獲った血だらけの服装で、銃まで持っているとなると、名のあるホテルにはなかなか泊めてもらえない。

何年か前のことになるが、この猟場でいつものように一人で大猪を獲った時、日が暮れてしまい明日の引き出しのために泊まることにした。ところが、前記のような理由で何軒ものホテルに断られ困り切っていたところ、泊めていただいたのがこのN旅館だった。本当にありがたい宿である。

ただし、この宿には一流ホテルのように館内に遊ぶ所も飲むお店もない。ビール一本（大瓶）付きで一泊八千円くらいなのだから仕方ない。その上、晩餐会場は泊まり客の全員が一緒の大部屋となるので、ワイワイ、ガヤガヤと思いの丈をぶつけて楽しむわけにもいかない。

元来、猪猟の晩餐会は激戦であればあるほど、その戦いに勝った日は盛り上がり、激戦の興奮がそのまま晩餐会に反映して、たまらない美味になったり、特別な醍醐味を作り出して生涯忘れられない

猪犬たちが後ろに噛み付いており、猪が丸見えで撃つには絶好のチャンスだが、そこには恐ろしい落とし穴がある。写真のように猪の頭の下に犬の足が2本見える。早まってこれを見逃して撃ってしまうと、間違いなく裏側で噛み付いている犬に当たることになる

財産となるのだ。そうした最高の雰囲気の中でのワイワイ、ガヤガヤは、猪猟人を元気づけ、さらなる成長へと繋げる大事な意義を持つものなのである。

私はそんな大切な晩餐会を目前にして、ただ一人で心ゆくまで楽しみ、今日の結果を素晴らしい思い出として胸に刻んでおきたい。

幸い気だての良い女将さん（従業員はいない）が、いつもビール一本と特製のお刺し身を用意して、予約時間に少しくらい遅れても待っていてくれるし、館内に三部屋しかない特別室にも泊めていただいている。天然温泉の風呂以外、これほどの条件が揃っていれば、単独猟人が疲れた体を癒すには十分である。

激戦を振り返りながら、ただ一本のビールを、のんびり時間をかけてちびりちびりと飲むのもなかなか乙なものである。

この年齢（七十六歳）になると、猪猟は知り尽くしているのだから、気の合う猟仲間とワイワイ、ガヤガヤと戦果を語り合って、楽しく盛り上がるのも結構だが、それよりも重要なことは「勝って兜の緒を締めよ」である。

猪猟はどこまで登っても常に命を懸けた激戦となる。戦うからには常に安全・安心の猪猟を心がけるのは言うまでもない。だから、深酒を慎み体力を温存して、必ず勝つための準備を整えるのも、こんな日の晩餐会の大切な心得なのである。

その会場となる大部屋には、既に四組の泊まり客が陣取ってワイワイ、ガヤガヤと盛り上がり、温泉の一夜を思い思いの話で花を咲かせている。私はその中を一礼して通り、片隅に用意されていた一本のビール付きの席に座った。

今宵は特別に盛り上がりたい気持ちであるが、残念ながら語り合う相手がいないのだから仕方ない。私は黙って一杯のビールをグイッと飲み、女将さん特製の刺し身を肴に乾杯となったのである。この一杯のビールこそが、何にも勝る究極の美味であり、その喉越しに伝わってくる感激は、今までの鍛錬の苦労や激戦の成果まで丸呑みして最高の思い出を作り出すのである。

どんなに望んだところで、私一人では絶対にできないグループ猪猟の醍醐味や、大勢でワイワイ、ガヤガヤ盛り上がる宴会の極致は演出できないが、ひと工夫さえすれば、単独猟であっても、たった一人の晩餐会であっても、前事を凌ぐ素晴らしい雰囲気を作り出せるものである。

私はいつものように一人でもできる全く独自の方法で目いっぱい楽しみ、「これからの猪猟」を元気づけるための晩餐会にしたくて頑張ってきたが、最近は狩猟者の減少と高齢化によってまさに風前の灯である。

この危機的状況の中では、猪猟を押し進めたり、ワイワイ盛り上がる晩餐会も現実問題としては難しい。猪猟がここまできたのだから、「これからの猪猟」の最大のポイントは原点に立ち返ることである。そして、耐え忍び、誰にも頼らず夢も希望も十分に達成でき、単独猟や一人の晩餐会を極致まで高めることである。

一人であっても、よく考え努力して必ず勝てる準備さえ怠らなれば、いつどこでも今日の激戦のように最高の結果が得られるのである。

私はこの素晴らしい結果、つまり激戦の興奮や勝利の味と、ワイワイとはしゃぎたい気持ちを、大瓶の中にぎっしりと詰め込み、その妙味付きビールを一人静かにちびりちびりと飲むのである。かなりの酒豪であっても、風呂上がりの一人酒は、激戦の疲れも手伝ってコップ二杯くらい飲むと気分は満点になる。そして今日の激戦がまるで走馬灯のようによみがえり、詰め込んだ大瓶の思いまでが次第に全身に染みわたって、勝利の美酒となって思い出の晩餐会となるのである。

ところで、どうして私が、一晩泊まりの単独猟をこだわって発信するのかである。この年齢になると、高速道路を何時間も突っ走る日帰り猟ができなくなってきた。若い頃は少し無理すれば、一人だって日帰り猟ができ、十分に楽しめていたが、全体的には時代の流れであり年齢からくるものであ

る。

これまで何度も繰り返し発信し続けてきたとおりで、できなければ何度でも考え、できるまでやり通すのが成功の決め手である。当然、好きな猪猟や愛犬たちを守りたいのであれば、生ある限り命を懸けて頑張らなければならない。

グループ猟ならばいざ知らず、単独猟では命懸けの激戦が主流となる。当たり前だが、激戦を実践する猪猟人は猟技術や犬芸に自信が持てるように成長すればするほど、さらなる難度の高い猪猟を求めていき、必死で挑戦しながら頂点を目指すものである。

しかし、単独猟とは皮肉なもので、難度が上がれば上がるほど戦いは激戦を極め、命にかかわる危険が増すことになる。実はこのことを中心に、実戦ごとに詳しく分析することで、安全・安心な猪猟道を探し当てていくのである。そして猪猟の反省や成長をじっくりと思考して検証する場となるのが、一人の晩餐会なのである。

そんな意味からも貴重な猪猟の灯を何としても守り抜き、進化・改良することで誰もが簡単に楽しめ、最高の結果が得られるような単独猟を完成して、「これからの猪猟」に繋げ、猪猟界全体の巻き返しを図りたいのである。

そんな壮大な目標を胸に秘め「まだまだこれからだ。負けてたまるか！」と、一人静かに闘志を燃やし、毎日愛犬たちとともに山野を駆け巡っている。そして、来るべき時のために体力の維持や猪猟技術（犬芸も含めた）を革新し、万全の準備を図るのである。

何としても日本の伝統である狩猟を守り抜き、忍耐強く頑張り通して、大好きな猪猟の極意や犬芸までを極限まで押し上げたい。その上で狩猟界全体の巻き返すチャンスを見極め、じっと我慢して待ってさえいれば必ず信念は通じるので、自ら大事な猪猟のあるべき姿も進むべき王道も見えてくるはずである。

猪猟もここまで差し迫ったからには、まさに忍耐の時機にあり、「待てば海路の日和あり（じっと待っていればやがて好運もやってくる）」との格言どおりである。

しかし、ここで啓発しておきたいことは、自分の猟法を限界まで高め、たとえ一人でも楽しみながら猪が獲れる実力を身につけ、万全の対策（準備）をしておくのがポイントである。ただ黙って「果報は寝て待て（幸運は人の力ではどうにもならないものだから、焦らずに時機が来るのを待つしかない）」と言っているのではない。

現実問題として「待てば海路」の兆候がにわかに高まってきて、願ってもない絶好の「日和」（チャンス）が訪れたようで、期待を新たにしているところでもある。狩猟人口が減り続けたことで、森の番人の役目ができなくなったその隙をついて、鹿や猪などに田畑や森林は荒らされ放題である。たまりかねた行政もやっと重い腰を上げ、その対策に乗り出したようだ。

群馬県などでは独自に大学と提携して獣害の対策をテレビで伝えていたが、肝心な対策の方向性は私たち猟人の考え方とは大きくかけ離れている。捕獲プロの認定制度であったり、防護フェンスの設置や罠猟の強化・促進などである。

人口の減少と高齢化によって必然的にやってきた山村集落の危機を救うためにも、全猟の会員方々はこの機を天命と受け止め、心して自らの役目をしっかりと果たさねばならない。

この八方塞がりの状況下にあっては、一人や二人の単独猟人が狩猟界の巻き返しを図り、起死回生の対策を訴え続けたところで、全国の狩猟者の心に届くわけでもない。まして、その行動に共鳴していただくのは容易なことではない。

それでも私は大好きな狩猟文化を守り抜きたい一念で『全猟』誌に載せてもらっている。これを全国に啓発することで、一人でも多くの狩猟者に届けて、現状の危機意識に目覚めていただき、一致協力し合って、今こそ大事な狩猟文化を守り抜き、未来まで通用する永久不変の狩猟道を構築したいのである。

（つづく）